京都大学	博士（社会健康医学）	氏　名	酒　井　未　知
論文題目	Post-discharge depressive symptoms can predict quality of life in AMI survivors：A prospective cohort study in Japan （急性心筋梗塞退院後のうつ症状は身体的なQOLの回復を予測する）		

（論文内容の要旨）

背景： 急性心筋梗塞の生命予後の向上とともに、生存者の身体的および精神的なQOL（健康関連QOL：Health Related Quality of Life）を高めることが重要な課題とされている。欧米の研究では、心筋梗塞発症後のうつは生命予後のみならず、退院後の身体的および精神的QOL低値の予測因子になることが報告されている。しかし本邦では、急性心筋梗塞患者の退院後のQOLを前向きに追跡した報告は少ない。また、退院後のうつ症状との退院後のQOLとの関連は検討されていない。

目的：

1）急性心筋梗塞を発症した患者の退院後12ヶ月間のQOLの推移を記述する。

2）退院後1ヶ月時点のうつ症状と、退院後1－6ヶ月の期間のQOLの回復量との関連を検討する。

対象と方法： 2003年6月から2005年11月に急性心筋梗塞で入院した320例から同意を得た。このうち男性275例を対象とした（女性は十分なサンプル数に満たなかったため、解析において除外した）。退院後1、6、12ヶ月のQOLの測定には、The 36-item Short-Form Health Survey （SF-36） を用い、身体的QOLのドメイン：身体機能、日常役割機能（身体）、痛み、精神的QOLのドメイン：全体的健康感、社会生活機能、活力、日常役割機能（精神）、心の健康を測定した。各ドメインのスコアを、日本の国民標準値が50点となるよう計算された偏差値スコアに変換した。退院後1ヶ月のうつ症状の有無は、心の健康スコアにより評価した。また、QOLの回復量は、退院後1、6ヶ月における各ドメインのQOLスコアの差により評価した。退院後1ヶ月のうつ症状の有無と、その後5ヶ月間のQOLの回復量との関連を、重回帰分析で検討した。

結果： 退院後6および12ヶ月の追跡完了例は、218例および212例であり、これを解析対象とした。退院1ヶ月では、特に日常役割機能（身体）(32.8)、日常役割機能（精神）(35.5)、社会生活機能(38.8)が非常に低値で、1-6 ヶ月の間で改善した。一方、身体機能、体の痛み、全体的健康感、社会生活機能、活力、心の健康は、12ヶ月間大きな変化がなかった。重回帰分析の結果、退院後1ヶ月のうつ症状と、その後5ヶ月間の身体的なQOL：身体機能（B=－2.62, 95%CI: － 5.00 to 0.23）、日常役割機能（B= -3.50, 95%CI: -6.94 to 0.06）、および体の痛み（B= -2.92 , 95%CI: -5.26 to 0.59）の回復量との間に、負の関連性が示された。

結論： 本研究では、日本人男性の急性心筋梗塞患者のQOLの推移を示し、退院1 ヶ月では、特に日常役割機能（身体）、日常役割機能（精神）、社会生活機能が非常に低値で、介入の必要性があることを示した。また、急性心筋梗塞退院後のうつ症状が、退院後のQOL、主として身体的なQOL、の回復量を予測する可能性があることを示した。今後、急性心筋梗塞の退院後のうつ症状に着目することで、身体的なQOL改善に役立つ可能性がある。

（論文審査の結果の要旨）

近年、急性心筋梗塞の生存者の増加により、発症後の生活の質向上は極めて重要な課題となっている。本研究は、本邦において、急性心筋梗塞退院後のQOLを前向きに長期追跡し、退院後のうつ症状との退院後のQOL回復量の関連を検討した初の報告である。

研究デザイン、解析を含めた研究方法は十分な検討を踏まえた妥当なものであり、本研究から、急性心筋梗塞男性患者のQOL各ドメインの推移の特徴が示された。退院1ヶ月では、特に日常役割機能（身体・精神）、社会生活機能が非常に低値で、1-6ヶ月の間で改善したが、身体機能、体の痛み、全体的健康感、社会生活機能、活力、心の健康は、12ヶ月間大きな変化がなかった。また、退院1-6ヶ月間のQOL回復因子を検討した結果、退院1ヶ月のうつ症状は身体的QOLの回復遅延の予測因子であることが示された。退院1ヶ月のうつ症状と精神的QOLとの有意な関連は認められなかったが、うつ症状があると精神的QOL回復が遅延する傾向は認められ、今後、更なる 検証が必要と考えられた。

以上の研究は、急性心筋梗塞退院後において、特に回復支援が必要なQOLのドメインの解明、ならびに、身体的QOLの回復遅延の予測因子の解明に寄与した。本研究の結果を踏まえた、急性心筋梗塞患者のうつの評価、うつへの介入効果の検証を通して、急性心筋梗塞患者のQOL改善に寄与することが大きく期待される。

従って、本論文は博士（社会健康医学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本学委申請者は、平成22年10月5日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。